

最優秀賞

「穴吹でおこった激甚災害被災者の体験談」

美馬市立美馬中学校 一年 逢坂 啓

僕の曾祖母の弟は、今年九十五歳になりますが、今も畑仕事を元気にこなすスーパーおじさんです。そんなおじさんが体験した、穴吹町で起きた災害について聞いてみました。

昭和五十一年に起きた災害では、甚大な被害が出て、古宮では一人が亡くなったそうです。災害が起こった直後、中山家の家族が全員無事だと確認したおじさんは、親戚の家が川の近くだったため、心配になり、探しにいったそうです。親戚の家についたとき、一瞬、「あつ、これはあかん。」と最悪の事態を想像しましたが、周りの家や店などは、みんな土砂で流されるも、親戚の家だけが流されずに、奇跡的に残っていて、親戚が助けを待っていました。災害発生から三日後に復興の為、自衛隊の人がかけつけてくれました。なかでも自衛隊の人が寝泊まりしたところが、被災した内田地域の中でも、高いところがあり、安全とされた中山家だったそうです。朝から晩まで、おじさんは、復旧作業を手伝い、おばさんは自衛隊の人たちの食事など身の回りの世話をしていたそうです。国は、昭和五十一年の災害を激甚災害に指定し、復興支援で莫大なお金が支援されました。

おじさんが作っていた田畑は、すべて土木工事の資材置き場になり、建設会社の人たちが、道具や橋を直したりするのに、必要な場所になりました。また、土砂崩れで、山肌が赤土になってしまった場所には、新しい植物が育つように、植物の種と肥料を混ぜたものをヘリコプターで、まいてまわったそうです。おじさんは、ヘリコプターがこの種の入った袋を空からまいていく間、次にまく種と肥料を混ぜる作業をし、次々に赤土のところにかくという作業を繰り返し、三日がかりで、新しい種がまかれました。三日後には、初日にまいた所からも芽が出て、赤土だったところに緑が広がりはじめていたそうです。

災害後しばらくして、おじさんの母校である古宮小学校の運動場に仮設住宅が建設され災害後三年で、元の場所に住めるようになり、六、七年かけて、道路など生活は元の通りになりました。しかし、そのとき流された家の人や周辺の人たちの中には、災害のあったこと、利便性が悪いことを理由に、町の方へ家を建てるなどしてふるさとを後にし、出ていった人もたくさんいた

そうです。

話を聞いていて、驚いたのは、飛び降りたら大けがをするくらいの高い橋の川にたくさん土砂が流れこみ、その橋が土砂にうまってしまったそうです。実際に現場に行ってみました。とても高い橋で、何メートルも土砂で埋まったということがわかり、僕はとても怖くなりました。

話を聞いたとき、おじさんから頼まれたことがあります。

「種をまいてから四十八年が経った。わしは、君に、この赤土だった山肌がどんなになっているか見てきてほしいんじや。今は、そこまで行くことができませんけんあ。」

僕は夏休みに、土砂災害で、山が崩れた場所を家族で見に行ってきました。周りの木々と比べると大きさや色合いは少し違いましたが、ぱっと見るだけではわからないくらい緑が復活していました。

この災害は、激甚災害に指定されたため、復興の為に国から公共事業として、たくさん仕事が行った。被災した地元の人にも依頼され、そのことで復興も進み、そして収入源になり、被災して大変だったが、金銭的に助かったそうです。

僕がこの話を書こうと決めたのは、おじさんが、実際に地元で被災し、復興工事をした最後の人になるといつか聞いたからです。

おじさんが、僕に絶対に覚えておきなさいと教えてくれたことがあります。「この雨なにかいつもとちがう？なんかおかしい。」と少しでも思ったら、すぐ安全な方へ、逃げるといことです。災害のときは、流れてくる水すべてが泥水になり、「ごごごごごごご」という聞いたことがない音、地鳴りがすると必ず土砂崩れが起こるので、少しでも、おかしいぞと思ったら、安全なところに、早めに逃げなければいけないと思いました。